

「ともし火のたとえ」

2015年06月25日

ルカによる福音書8章16節～18節。「ともし火をともし、それを器で覆い隠したり、寝台の下に置いたりする人はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、人に知られず、公にならないものはない。だから、どう聞くべきかに注意しなさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる。」

油を入れた器に灯心を入れて火をともし。真っ暗な部屋の中で、ともし火は人々の心をどんなに明るくしただろうか。ともし火を覆い隠したり、寝台の下に置く者はいない。燭台の上に置いて、ともし火の光で周りを照らさせる。

聖書には「光」に関する記述は多い。旧約聖書の創世記の冒頭に天地創造物語が書かれている。第一日目の創造は「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である」であった。この光は太陽や月や星の光ではなく、神の根源的な光である。新約聖書のヨハネ福音書の冒頭はキリストを「言」と捉え、ロゴス・キリスト論を展開している。1章4節、5節で「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」と書かれている。

「言」であるキリストは「命」であり、命は人間を照らす光で、この光が暗闇の中で輝いている。8章12節には「イエスは再び言われた『わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ』」と書かれている。神の光を信じ、光である主イエスに従う者は暗闇を歩むことがない。

人は皆、光に憧れる。ともし火の光を覆い隠すことは決してしない。ここから、主イエスは二つのことを語られた。一つは「隠れているもので、あらわにならないものではなく、秘められたもので、人に知られず、公にならないものはない」である。隠され、秘められたものは必ず人に知られ、公になると言う。国家機密、冤罪による死刑、知りたくても知り得ない事例など、秘密裡のことが多いのではないか。最近では「特定秘密法」という、国民に閉ざされた法が施行された。主イエスの言葉のように、全てが明るみに出されると楽観できない。ただ、神の前には全てが露わであるということは確かである。神はお見通しである。これは、恐怖であると共に安らぎでもある。神に知られていることを安らぎと思って、生きる者でありたいと思う。

もう一つは「持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる」である。この言葉を「ともし火のたとえ」の続きに、なぜ書いたのであろうか。ルカ福音書の著者はマタイ福音書12章12節、25章29節の言葉を、ここに入れて編集したようだ。「だから、どう聞くべきかに注意しなさい」とつなげている。富める者はますます富み、奪われる者はますます奪われる現象を経済的に捉え「マタイ効果」と言っているが、その通りのことが起こって、貧富の格差が広がっている。しかし主イエスは、与えられた能力を出し渋っていると枯渇する、能力は存分に生かせという意味で語っている。光の前で、全てのことが露わになる。だから、どんなに苦しい人生であっても投げ出さず、精一杯生きなさいと続くのであろうか。聖書の書き方は不親切だから、多様な解釈を生み出していく。これも「興」ではないか。